

教師の子どもの評価

落合 正行・石王 敦子・井上 知子

はじめに

今日、学級崩壊、青少年の非行や犯罪、いじめなど、子どもに関わる問題は社会問題として大きくとりあげられている。最近は学校現場が事件の舞台になることも多い。学校で教師が傷つけられたり、子ども同士の暴力事件、さらに陰湿ないじめが自殺等悲惨な結果を招いたりしている。そして、このような問題が議論されるときには、「昔に比べて子どもが変わった」という指摘がなされる。

しかし、本当に子どもは変わったのだろうか？「子どもが変わった」というときの子どもは一体何を指しているのでしょうか？子どもが変化したと言うとき、集団としてそのような傾向を示すようになっているのか、それとも特別な個人の際だった行動を指しているのでしょうか？あるいは、昔は特殊な行動であった行動特徴を示す子どもの割合が、最近が増えてきたということを意味しているのでしょうか？または、行動や心の特徴の種類によって、様々な様態を示すのでしょうか？この意味合いの違いは、大変重要なことだと思われる。

確かに、子どもの変わり様は、実際のところさまざまな角度から検討する必要のあることだが、本研究では、まずは「子どもは本当に変わったのか、もし変わったのなら実際にどのような事実として変わったのか」ということを、実証的なデータを基に検証することにした。

調査1では、5・6年生を対象に、自己意識の他に、落合・石王（2005）で指摘されてきた行動特徴から、「自分の評価（主観的統制感）」「自分の管理（行動の自己統制）」「ストレスに対する対処」を取り上げた。調査2では、5年生を対象に、自己意識尺度に加えて、「児童用コンピテンス尺度」「社会的責任目標についての調査」をすることにした。

自己意識を取り上げたのは以下の理由である。人はそれぞれ自己意識という自分についての考えや知識を持っている。小学校5・6年生頃になると、それまでは「私は～を持っている」「私の身長は～である」など、自分の外面的特徴ばかりを自分の特徴としてあげていた子どもが、「私は恥ずかしがりやである」など、自分の内的特徴をあげはじめる。すなわち自分の内面に意識が向き始める頃なのである。この時期の子どもを対象にして、自己の外面や他者に対する態度という、自己の外面への注意の側面をみた「公的自己意識」と、自己の内面、感情、気分など自己の内面に注意を向けやすい傾向を示す「私的自己意識」とを測定し、過去の調査結果との比較から、子どもの変化をみることができると考えた。

さらに他のテストは、落合・石王（2005）で述べられた、現在の子どもの行動や心理的特徴を反映したものを選んだ。落合・石王（2005）によると、学級崩壊でみられる子どもたちの主な特徴は、我慢ができない、規則が守れない、教師の指導に従わない、自分で

考えることなく友達に同調する、自分の持ち物の管理ができないなどである。青少年の非行や犯罪では、「キレる」という言葉で代表されるように、すぐに暴力に訴える、感情のコントロールができないことに加えて、正高(2001)は、自分の気持ちを言葉であらわすことが苦手というコミュニケーション能力の低さなどをあげている。また、いじめなどで攻撃的行動をとる子どもは、相手の気持ちを考えるという共感性が低いことや、暴力を有効な手段と考えていることなどが特徴としてあげられる。

これらを考慮してみると、子どもの問題行動の背景には、「自分が何をしても変わらない」「努力をしても何も変わらない」という自己統制感のなさや、「やりたいことがあってもがまんして、しなければならないことをする」「時と場合によってはがまんできる」という行動の自己統制ができないこと、さらにストレスに対して耐性が低く、すぐ暴力的行動や短絡的な解決に訴えようとするのがあげられる。調査1では、これらの「自分の評価（主観的統制感）」「自分の管理（行動の自己統制）」「ストレスに対する対処」を調べ、過去のデータと比較して検討することにした。調査2では、「自己有能感」や「社会的責任目標」を調べることにした。自己有能感というは、「自分は～できる」「～には自信がある」という感情である。自己有能感の低い子どもは、何かに打ち込むことがなく、いじめなど短絡的に結果が出る行動にはしって満足感を得たりすることがみられる。また、自分の都合だけを考えて人に迷惑をかけても平気というような行動もみられる。それは、社会の中で、ルールを守って社会的役割への期待に応える行動ができないということでもある。それぞれの調査では、過去の調査との比較をして子どもの経年的変化をみるとともに、各テスト間の関係性をみることによって、現代の子どもの心理的特徴をより具体的に浮かび上が

らせることができると考えた。

その結果、10数年前のデータと比べると、自己意識の発達では、他者や自己の外観に注意を昔ほどはらわなくなり、むしろ自己に注意が焦点化されるようになって、より内向的傾向を示すようになってきている。自分の評価（主観的統制感）については内的統制感が当時の小学生より弱まり、外的統制感が少し強くなっている。自分の管理（行動の自己統制）については、昔は5年生から6年生にかけて自己制御の成績が下降していたが、今は上昇している。ストレスの対処については全般的に少し値が高くなっており、その中でも注目すべきは行動的同調で、男女とも今日の小学生のほうが高い得点を示している。コンピテンステストに関しては、社会コンピテンスの平均値が少し今日の子どもの方が高い位であり、子どもの自分の能力の評価に関しては必ずしも今の子どもの方が低いことは示されなかった。社会的責任目標（向社会的目標と規範遵守目標）に関しては、11年前に比べて向社会的目標に関しては同じような意識であるが、規範遵守目標については高得点になってきており、より規範重視となってきたことがわかった。

これらの結果をみてみると、集団としては少なくとも10年前の子どものとそれほど大きな変化はないといえる。しかし、日々子どもと向かい合い生活をともにしている現場の教師は、どのようにとらえているのだろうか。この調査結果のように、それほど大きな変化はないと感じているのだろうか。そこでこの研究では、教師が今の子どもたちの行動をどのように評価しているのかを見ることにした。それは、子どもの行動の変化がいかなるものであるかを把握する重要な情報になると考えられるからである。

目的

教師の子どもの行動の評価について調べることにした。ただ、どのように調べるかで引き出される結果も当然影響されと考えられる。ここでは、教師が道徳的に善悪であるとか、社会的に好ましいあるいは好ましくないといった評価基準ではなく、教師という立場で子どもをみてきた立場から、気になる、理解できない、驚く、やめたほうがよいと思う、放置できないなどさまざまなかかわりから多面的に子どもの行動を評価してもらうことにした。

方法

被調査者

福井小学校・太田中学校・水尾小学校・葦原小学校・東雲中学校に協力を頂いたことに感謝の意を表します。小学校、中学校の先生を対象に、調査を行った。小学校3校、中学校2校の校長先生にお願いして、先生方に調査に協力していただいた。回答は、後日回収した。

答えていただいた先生は、小学校12名（男子2名、女子10名）で、年齢は25歳から54歳まで、教職歴は2年から34年までであった。中学校の先生は、5名（男子2名、女子3名）、年齢は34歳から58歳まで、教職歴は11年から30年までであった。

調査項目

小学校、中学校の先生を対象に、担当している児童・生徒について以下の質問に自由記述で答えてもらった。

- 1 気がかりな行動
- 2 理解しがたい行動
- 3 驚かされる行動
- 4 修正したほうが良い行動

5 以前の子供と比べて変わってきた重大な行動変化

6 今の子供に身につけてほしい行動

7 ほっておけない（対処しなければならない）行動

8 好ましい行動

9 行動評定

担当している児童・生徒についての以下の行動特徴について、5件法で評定をしてもらった。評価してもらった行動は、これまで今日の子どもの特徴と指摘された行動であり、具体的には、コミュニケーション能力、対人関係スキル、自己肯定感、効力感、自尊感情、自己制御性、学力、学習意欲、時間展望の欠如であった。

結果

1 気がかりな行動

全部で、21の反応があった。

基本的な身につけるべき行動が身についていない（基本的生活習慣や常識や善悪の判断をする力が身についていない、家庭学習（予習、復習）をしてこない、返事、あいさつができない、人の話が聞けない等）、自己制御（気に入らないとすぐに暴力で表す、じっとできない、授業中にトイレに行きたがる、できない、わからないととりあえず大きな声で言う、すぐに手が出る、立ち歩き、忍耐力がなく、すぐにどうでもいい等）、攻撃性（けがをさせる、気に入らないとすぐに暴力で表す、言葉使いが悪い（しね、ボケなど）等）、社会性（大勢で遊ぶのに子供たち同士で呼びかけあえない、関係がないと知らん顔する、返事、あいさつができない等）があげられている。

多くの子どもが示す行動ではないが、気がかりな行動として指摘されている行動は、よく言われている子どもの特徴の一端が指摘されている。もっとも、親の問題として指摘す

る意見もあった。

2 理解しがたい行動

全部で、18の反応があった。

忘れ物（平気で忘れ物、宿題忘れをする、忘れる児童が非常に多い等）、やるべき事をしない（やるべきこと（プリント直し）があるのに遊びに行く）、整理整頓（下に物が落ちていても、自分のでないと拾わない、机の周りにえんぴつやくつ下、うわばきが散乱していても、いっこうに気にならない、見て見ぬふり（床に落ちている物を拾わない、友達を手伝わない、身の回りの整理ができない子が4から5人いる、物を大切にしない（名前のない落とし物が散乱）など）、平気へいきでうそをつく、ささいなことで切れて、大ゲンカになる等があげられている。

3 驚かされる行動

全部で、14の反応があった。

攻撃性の程度（えんぴつなど、先のとがったものを投げたり、友達に向かっていったとき、大人、教師に対しても暴言を吐くことがある、生徒同士のけんかで机を投げる等）、大きな声を突然出す、話を聞いていない、開き直る、見て見ぬふり、物を大切にしない等が指摘されている。一方、自主性や行動力などの地力があるという点も挙げられている。

4 修正したほうが良い行動

全部で、17の反応があった。

挨拶や返事（あいさつの習慣がない）、言葉づかい（暴言、腹が立ったり、いやなことがあるとすぐにむかつく、さいあくと言ってしまふ、目上の人をうやまう気持ちや敬語）、自分の感情をコントロールできるように、じっと人の話が聞けるように、悪いと知っていて、集団の中で同調してしまふ、授業が始まっているのに早く行動しようとしなない、食の偏り等が挙げられている。

5 以前の子供と比べて変わってきた重大な行動変化

全部で、17の反応があった。

個人化（クラスとかグループの仲間意識があまりなくて個人単位の見方しかしない、男子はやさしい生徒は増えたがリーダーシップをとれる生徒は減った）、自己制御（自分たちのころはもっとがまんしたりすることが多かった気がする、みんなのためにとかみんなと一緒にという自分を押さえていくことも必要）、言葉使い（相手によって言葉使いを変えることができない（男女とも言葉使いが荒い））、自分で考え自分で行動するということ、集中が持続しない、責任を取ろうとしない、親について強く感じる等に加えて、友達にたいする声掛けがやさしくなった等の評価もあった。

6 今の子供に身につけてほしい行動

全部で、32の反応があった。

基本的生活習慣（あいさつ、早寝早起き、食生活など）、相手のことを考える（相手に合わせて話せる、相手の心を想像して行動する、自尊感情を持ち、他人を認めてあげてほしい、仲間を大切にする気持ち、人の話をじっくりと聴くことができる、人の役に立とうとする行動（周りに心地よさを与えようとする心）、周りの人の動き、気持ちを察すること、みんなで協力したり助け合ったりできる力、教師や目上の人への敬語等）、責任（自分で考えて行動する、自分の行動に責任を持つ）、自立心（自分のことは自分でする、主体的に問題解決する力、誰かに言われてからするのではなく、自分たちで考えて行動する、自らを律する行動）、忍耐力（だめだとすぐにあきらめない、つまらないとすぐに決めつけない）等があげられている。

7 ほっておけない（対処しなければならない）行動

表1 教師の子どもの行動の評定値平均値及び標準偏差

	コミュニケーション能力	対人関係スキル	自己肯定感	効力感	自尊感情	自己制御性	学力	学習意欲	時間展望の欠如
平均	3.214	3.000	3.429	3.400	3.357	3.154	3.231	3.643	3.083
標準偏差(SD)	0.579	0.679	0.514	0.516	0.497	0.689	0.599	0.633	0.793

全部で、20の反応があった。

攻撃（相手が傷つく言葉を平気で言う、一方的に暴力をした場合、嫌がらせ、すぐに切れて、暴力をふるう、すぐに手や足がでる、人の心身を傷つける行動、ひとをたたく、暴言、物を持って暴れた場合等）、法に触れる行動や間違った行動、金銭にかかわること、言葉使い、ゲーム、テレビでの子守等であった。

8 好ましい行動

全部で、24の反応があった。

思いやりのある行動（相手のことを思いやって行動する、相手の立場に立って考えられた時、牛乳をこぼしたらふいてあげるなど、困っている人を助ける・困った時には助けてもらう、友達が困っていたらすぐに助けてあげる等）、周りの人と協力できる、感謝する気持ちを持つこと、公平で順当（妥当）な価値観を手に入れること、自分を大事にし、友人や家族を大事にする、責任を持って仕事や課題に取り組む、周りの人と協力できる等であった。

9 行動評定の結果

コミュニケーション能力、対人関係スキル、自己肯定感、効力感、自尊感情、自己制御性、学力、学習意欲、時間展望の欠如についての教師の評定結果を、表1に示しておく。

各行動の特徴の平均値の違いを1元配置の分散分析で行ったところ、有意差が見られなかった（ $F(8/117) = 1.391, ns$ ）。平均値を見ると3点台であり、中くらいの得点である。このことは、気になる行動等具体的に行動をあげてもらふと個人の行動としてあげられる

ために際だった行動として過大解釈されがちであるが、実際の子どもたちは特にコミュニケーション能力、対人関係スキル、自己肯定感、効力感、自尊感情、自己制御性、学力、学習意欲、時間展望の欠如といった行動特徴に関して、問題があるというわけではないことが示されている。

考察

気がかりな行動として指摘されている行動は、返事やあいさつ、人の話を聞くなど基本的な身につけるべき行動が身につけていないことや自己制御（衝動性や我慢のなさ）と攻撃性と社会性があげられており、これまでよく言われている子どもの特徴の一端が指摘されている。理解しがたい行動としては、忘れ物や整理整頓という実際の生活の中でできていなければならないことである。教師からすると、なぜこのような基本的なことができないのか不思議な行動という感じであろう。驚かされる行動に関しては、攻撃性の程度、大きな声を突然出す、話を聞いていない、開き直る、見て見ぬふり等が指摘されている。一方、自主性や行動力などの地力があるという点も挙げられている。修正したほうが良い行動は、挨拶や返事、言葉づかい、自分の感情をコントロール等、気がかりな行動と攻撃性の高い行動が挙げられている。以前の子供と比べて変わってきた重大な行動変化としては、個人化、自己制御、言葉使い、自分で考え自分で行動するという点、集中が持続しない、責任を取ろうとしないなど、気がかりな行動、修正したほうが良い行動と共通した事柄が挙げられている。一方では、友達にたいする声

掛けがやさしくなった等の評価もあったことは注目に値する。今の子どもに身につけてほしい行動としては、基本的生活習慣、相手のことを考える、責任、自立心、忍耐力、諦めない等があげられている。ほっておけない（対処しなければならない）行動としては、攻撃、法に触れる行動や間違った行動、金銭にかかわることなど、心身への危害、人道上の問題、犯罪などに関わる行動が挙げられている。好ましい行動としては、思いやりのある行動、周りの人と協力できる、感謝する気持ちを持つこと、公平で順当（妥当）な価値観を手に入れること、自分を大事にし、友人や家族を大事にする、責任を持って仕事や課題に取り組む、周りの人と協力できる等であった。以上のことから、気がかりな行動、理解しがたい行動、驚かされる行動、修正したほうが良い行動、以前の子供と比べて変わってきた重大な行動変化、今の子どもに身につけてほしい行動、ほっておけない（対処しなければならない）行動、好ましい行動に関しては、それぞれ違った行動特徴が挙げられており、単なる善悪といった評価基準では測ることができない形で教師は子どもの行動を評価し、それに応じて教育的働きかけや実際上の指導を行っていると考えられる。

一方、今日の子どもの問題があると指摘されている行動（コミュニケーション能力、対人関係スキル、自己肯定感、効力感、自尊感情、自己制御性、学力、学習意欲、時間展望の欠如）についての教師の評価は、特に問題となる行動は見られていない。平均点であり、それぞれの特性が今の子どもの場合には特に欠如しているわけでもなく、また特に優れてきているわけでもない。

結論

以上の結果をまとめると、気がかりな行動、理解しがたい行動、驚かされる行動、修正し

たほうが良い行動、以前の子供と比べて変わってきた重大な行動変化、今の子どもに身につけてほしい行動、ほっておけない（対処しなければならない）行動、好ましい行動に関しては、これまで言われてきているような現在の子どもの問題行動をよく示していると考えられるが、一方で、同じ教師による行動評価ではコミュニケーション能力、対人関係スキル、自己肯定感、効力感、自尊感情、自己制御性、学力、学習意欲、時間展望の欠如に関しては特に問題になるような結果は認められていない。

このことから、本当に子どもは変わったのだろうか？という問いに関しては、変わったともいえるし、変わっていないとも言えるということになる。

それでは、「子どもが変わったともいえるし、変わっていないとも言える」ということは、子どもは集団としてそのような傾向を示すようになっているのではないことは行動評価から明らかであるが、教師が挙げる個々の行動は確かに変わった面があるといえる。

したがって、特別な個人の際だった行動を指している場合と、昔は特殊な行動であった行動特徴を示す子どもの割合が最近が増えてきたということを指している場合との混在、いわば行動や心の特徴の種類によって様々な様態を示すということがこの調査から言えることである。

今後は、行動や心の特徴の種類によって様々な様態を明らかとすることが課題となる。

引用文献

- 落合正行・石王敦子 2005 現在の子どもの行動および心理的特徴—原因とその対処法への基礎的資料— 追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要, 2, 29-46.
- 正高信男 2001「キレル」心と幼児体験 心理学ワールド14, 17-20. (社)日本心理学会